



TITLE:

コメント2

AUTHOR(S):

森, 理恵

CITATION:

森, 理恵. コメント2. CIRAS discussion paper No.95 : 装いと規範 3 -- 「伝統」と「ナショナル」を問い直す 2020, 95: 42-43

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_95_42

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

コメント 2

森 理恵 日本女子大学家政学部 教授

私は服飾史を研究しています。本日はたいへん興味深いお話をありがとうございました。まず小形さんの報告については、着物をファッション論や社会学できちんと研究していただくことが重要で、そうしていただきたいと思っていたので、このような研究が出てきたことはありがたいというか、うれしく思いました。着物というのは「日本の伝統的な民族衣装」とされ、別枠のような研究のされ方をしてきました。「ちょっとまずいことを言ったらやばいんじゃないか」とか「うるさい人に怒られる」みたいな感じで別枠みたいに扱われてしまうことが多いので、それをなくして、社会学とかファッション論の立場から研究していただけることは、新しい動きでもありますし、とても重要だと感じました。感銘を受けたというのが大きな感想です。

■ 時代を代表する着物の諸相のなかで 重なり合いながら前面に出るものは何か

今日のお話をうかがって、貴志先生から「男性はどうだったか」というお話もありましたが、今日のお話はジェンダー論にもなっているような印象を受けました。着物が（男性ではなく）女性の生涯を描くとか、ジェンダー論的な見方というか、まとまり方もあるのかなという感じがうかがいました。たいへん興味深く思いました。

細かいことで言いますと、1990年代以降の時期をコスプレ期みたいな感じで位置付けられたのかなと思いますが、たしかにそういう動きが近年では顕著になってきました。確認してよかったと思って忘れましたが、1990年ぐらいでしょうか、鷺田清一さんが「現代の着物はコスプレになっている」と言ったことがありました。それはたしかにそうかなと思いますが、一方で私の個人的な興味で言いますと、前回この会でお話ししましたが、植民地時代の台湾や、もっと前の東南アジアなどでも、写真館で着物を着て写真を撮りましょうみたいなコスプレ的な要素はありました。昔からそれこそジャポニズムの流れもあるわけですし、先ほど西洋の人はというお話もありましたし、最

近の京都観光のなかで見られる顕著な例はありますが、ジャポニズム以来ずっと世界各地であったものかなと思いました。

もう少しそのあたりで進めますと、最後のまとめのところで四つの時期に分けておられます。もちろんコスプレもそうですが、「芸術作品としての着物」というものも、日本で最初の着物関連分野の人間国宝は1950年ぐらいだったかと思いますし、もちろん「生活着としての着物」のときも「正装としての着物」は存在したので、これは重なりながらずっと流れています。そのなかで特徴的なものを取り上げて時代区分をされたと思いますが、そのあたりの重なり合いながら前面に出てくるものが何かみたくなたちで見せていただくと、より深みが出るのかなと思いました。

■ 着物とナショナリズムとの関係をどうみるか ——「民族」の強調の起源と右傾化

あと、私の興味で申し訳ないですが、ちょっと気になってしまうのが民族主義との関係です。杉本先生の話でも出ていたと思いますが、民族主義とかナショナリズムと着物との関係はすごく気になります。今日のお話では、もちろんないものねだりで、「そんなことには興味がないから、やりたくない」ということかもしれませんが、個人的には気になってしまいました。

そのことで言うと、資料にある鶴見俊輔の文章で私が気になったのが、「魂の遍歴」とか「素材とともに霊が動いて」とかいう言説は、「何だこれ……」と思って、着物にこういう思い入れみたいなのをするというのは、いったい何なんだろうと思いました。「着物でないと日本人の心は語れません」とか言い出す人とか、「着物には日本民族のDNAが……」みたいな、そういう言説はいったいどこから出てきたのかというのが私個人はとても気になるので、何かご示唆があればお教えください。

そのような観点からみると、「おそろいのきものに晴れの日の喜びもひとしおです」というキャッチコ

ピーがついた新聞広告も、じつは続いていると思います。小形さんの今日の整理のなかでは新しい時代ということですが、「娘と母とおそろいの着物を着ます」とか「日本人として続いていく何か」みたいな、そういうものはいったい何だろうかと思います。他にも『美しいキモノ』の読者ページの「三人の子供の育児に追われ……羽織。いつまでも大切に着よう……」といった言説は、いったい何だろうかというのがすごく気になっています。それを明らかにしたいと思っていろいろやっているうちに私の研究は変なことになってしまって、なかなか答えは出ませんが、何かご示唆があれば教えていただきたいと思います。

全体を絡めてみる努力をしてみますと、中国のところでも、習近平と唐装との関係とか、インドのところでもモディ政権との関係とか、そういうナショナリストティックななかで、やはり着物が前面に出てきたというのは、日本の政権が右傾化していることと平行ではないかと思っています。ですから、安倍政権なりオリンピック誘致なり、そのことと着物コスプレの繁栄とは関係があるのかなのか。あると考えるのは考え過ぎなのか、そのあたりも教えていただければと思いました。

最後のまとめを見ると、いま1週間の服をレンタルできるというお話があって、それは着物に限った話ではないということですが、今日のお話は着物に限った話なのかどうなのか。着物により特徴的に表れているだけであって、洋服も含めた衣服全般の話なのか、そうではなくて、着物でないとうちはならないという話だったのか、そのあたりが少しわからなくなってしまいました。作るということについても、かつては洋服のほうでも家庭裁縫が盛んだったので、着物に限った話ではないのかなと最後のところで思いましたが、そのあたりもお話があればお願いします。

■台湾で学生装はいかに受容されたか 日印の地域認証法の違いは何か

劉さんのお話は、少し前に東京でも、今日とは違う角度でしたが聞かせていただいて、すごく知ったことでしたし、興味深くて、わくわくしながら聞いていました。体操服がきっかけになるというのは、イギリスや日本の女子制服もそうですし、共通点はあるし、おもしろいなと思って聞いていました。貴志先生のおっしゃるように、日本、中国、シンガポールというのがバラバラだというのはたしかだとは思

いますが、ここでシンガポールを持ってきて、シンガポールはこうだったと聞くことによって、深まりとつか関係性とか、素人にとっては地域的広がりを持って聞けたので、だったら台湾はどうだったのかなとかいろいろ思って、興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。

杉本先生のお話もとても興味深かったです。地域認証法については、時期はインドのほうが遅い気がします、日本のさまざまな制度とどう違うのかが気になりました。日本の場合は、認証したことによって、たいてい行き詰まって、固まってしまうというみたいな事例、つまり、裏目に出ている事例のほうが多いのではないかと思います。最後に名言をおっしゃっていて、感動しました。ファッションである限りナショナルをすり抜けてしまうという、これは名言として壁に貼っておこうと思いました。感動しました。ありがとうございました。